秋の初めに思いつくままに

松浦　純子

九月になり暦の上では秋になった。収穫の秋、勉学の秋、暑さ寒さも彼岸までということばは初秋の今ではまだ実感がわかない。

猛暑という言葉が聞かれなくなると、ほっとすると同時に、「来年、再来年、さらにその先はもっと暑くなるのだろうか」という新たな不安が生まれてきた。

十数年前までは学校の制服は、六月から九月までが夏服で、十月から五月までが正式な制服である冬服。ところが現在では、四月中旬から十一月頃まで夏服を着ても良い学校が見られる。一年の半分以上は夏服。こちらが正式になりそうな勢いだ。

また、砂漠地帯の人は白い服を着て熱を吸収しないようにしている。ここからヒントを得たのかどうかは分からないが、日中部活をする高校野球の選手も白い帽子、白いユニホーム、白いシューズに多くの学校が変わってきたそうだ。

かつてヒートアイランド現象ということばが盛んに言われた時期があった。これは都市の中心部が周りの地域より気温が高くなるという部分的な現象で、エアコンの室外機から出る排出熱もその現象の悪者の一因だったと記憶している。しかし、今では高温（ヒート）は一地域（アイランド）の問題ではなくなり、エアコンの使用も「適切に使いましょう」と推奨に変わってきた。ニュースでは、室内で人が熱中症が原因で亡くなると、エアコンを使っていたか否かまで伝えている。

天気予報を見る時も、かつては30℃以上か否かが気になっていたが、最近では35℃を越えるかどうかが気になり、35℃未満だとほっとしてしまう。フェーン現象以外で最高気温が40℃になるなんてあり得ないと思っていたら、40℃以上の地域が毎日のように複数出てきた。熱帯夜も当たり前になってきたためか、「今夜は熱帯夜です」ということばも聞かれなくなった。

数千年の人間の歴史を見ると、気候の温暖化は人々の生活に、農業や商業の発展をもたらしてきた。しかし、この恩恵が理解しにくくなってきた昨今である。